

第21回防衛問題セミナー

演題：自衛隊の国際協力開始20周年

基調講演 自衛隊の国際協力開始20周年に当たって

講師：防衛大臣政務官 下条 みつ 氏

講 演 ソマリア沖・アデン湾での海賊対処活動

講師：第3次派遣海賊対処行動航空隊司令

(現 統合幕僚学校教育課教務班長) 2等海佐 清水 雅彦 氏

議事 概要

【司会】

定刻となりましたので、ただいまより第21回防衛問題セミナーを開催させていただきます。

それでは、主催者を代表いたしまして、北関東防衛局長の鈴木良之（すずき よしゆき）より、開会の挨拶を申し上げます。

【北関東防衛局長 挨拶】

皆様こんばんは、北関東防衛局長の鈴木でございます。

本日は、第21回防衛問題セミナーにご参加いただきましてありがとうございます。主催者を代表いたしまして一言ご挨拶させていただきたいと思っております。

私ども北関東防衛局の役割の1つが、国の防衛について国民の皆様方のご理解とご協力を深めるための各種企画の実施であります。

本防衛問題セミナーも、皆様に密接でありながら遠い存在になりがちな「防衛省・自衛隊の任務」をご理解いただく機会と考えております。

小山市は、天下分け目の関ヶ原合戦の際の小山評定の地として有名であり、「開運のまち」と称されていると聞いております。このような縁起の良いところで、第21回防衛問題セミナーを開催することができまして、大変嬉しく思っております。

さて、今年は、1991年に海上自衛隊の掃海部隊がペルシャ湾に派遣されてから国際協力20年の節目の年にあたります。

そこで、今回は下条みつ防衛大臣政務官にお越しいただき、「自衛隊の国際協力開始20周年に当たって」について基調講演をしていただきます。

また、続いて第3次派遣海賊対処行動航空隊司令の清水雅彦2等海佐から「ソマリア沖・アデン湾の海賊対処活動」について講演していただくことといたしました。

防衛省のトップと現場指揮官、お二人の貴重なお話をどうぞお聞きください。

限られた時間ではございますが、本日のセミナーを通じ、防衛省・自衛隊の活動・任務をご理解いただきまして、今後、防衛省・自衛隊に対し、より一層のご理解・ご協力をお願いしたいと思っております。

最後になりますが、今回セミナーを開催するにあたり、ご協力いただきました関係各位に対し、この場をお借りしまして御礼申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

【司会】

続きまして、ご来賓の小山市市民生活部長の渡辺一男様、ご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】

皆さん、改めてこんばんは。ただいまご紹介をいただきました、小山市市民生活部長の渡辺でございます。本来ならば、大久保市長がみえて、防衛問題セミナー・イン・小山の開催にあたり、歓迎の言葉を申し上げるところでございます。

特に、今回は、講師の下条先生が、大久保市長、農林水産省に勤務の時の同僚ということで、本当に市長、残念がっておりましたが、どうしても公務のため出席できません。

市長より、メッセージを預かってまいりましたので、代読させていただきます。

『本日ここに、防衛省北関東防衛局主催の第21回防衛問題セミナーが、当小山市で開催されるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

はじめに、さる3月11日に発生した東日本大震災で被災され、お亡くなりになりました方々に、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

防衛省・自衛隊の皆様におかれましては、震災発生時から、精力的な救援活動に従事され、復興に向けて日々活動を続けられてこられました。

心から敬意と感謝を申し上げます。

さらに、自衛隊は国内を守るだけでなく、自衛隊の国連平和維持活動、いわゆるPKO活動において、国際社会でも高く評価されております。

今、我が国を取り巻く安全保障問題や不安定要因は多様で複雑かつ重層的なものとなっております。

それに起因する様々な事態に自衛隊が的確に対応し、国内のみならず、地球的な安全保障問題にも、関係各国と連携して取り組んでいただいていることが、私ども国民にとって大きな安心となっております。

さて、本日そのような中で、このセミナーが開催されますことは、まことに的を射たセミナーではなかろうかと存じます。

自衛隊の国際協力が開始されて20年の節目にあたり、これまで自衛隊が取り組んできた活動の意義と成果をテーマに、先ほどお話ししました防衛大臣政務官の下条みつ先生のお話を拝聴することは、私にとってこの上ない喜びであります。

さらに自衛隊員の現場の体験などを第3次派遣海賊対処航空隊司令2等海佐の清水先生からもお話を伺えることも光栄に存じます。

結びに、この防衛セミナーがご参会の皆様にとって意義あるセミナーとなりますこと、合わせて皆様のご健勝、ご多幸を心からご祈念申し上げご挨拶といたします。

平成23年12月15日 小山市長 大久保 寿夫 』代読。

大変おめでとうございます。

【司会】

ありがとうございました。

皆様、ステージの配置を変更いたしますので、しばらくお待ち下さい。

お待たせいたしました。

それでは、基調講演「自衛隊の国際協力開始20周年に当たって」について始めさせていただきます。

講師は、下条 みつ（しもじょう みつ）防衛大臣政務官です。下条政務官ご登壇ください。

【基調講演 下条みつ防衛大臣政務官】

皆さん、こんばんは。お疲れ様でございます。

まずは、第21回になるこのセミナーにご参集いただき、本当にありがとうございます。また、日頃から防衛省・自衛隊の本当にいろいろな意味での理解者、支援者としてお力添えいただいて心から感謝申し上げたいというふうに思っております。

今、渡辺さんから小山市長の同僚というお話をなさったと思うのですが、実を言うとちょっと違ってしまっていて、私どもの一川大臣が、農林省におりました時に、大久保市長さんとお近くでお仕事をさせていただいたということでございます。

今日は、限られた時間ですが、できるだけ分かりやすく国際協力の20周年を迎えた今年についてお話させていただきます。その後、航空隊司令として、海賊対処について本当にお骨折りいただいた清水さんの方から事細かく現場の報告をするということでございます。是非、ご拝聴いただきたいと思います。

また、今日は私ちょっと事情がありまして、講演の後すぐまた上京しなくてはならないのですが、その間の何分間か質疑にちょっと時間をとってございます。いい機会ですから、私にこれは何なんだと、これはどうなんだというのをぶつけていただいて、PKOについても、またそれ以外についても、ご質問、ご要請などあれば、是非ぶつけていただきたいと思います。

ともかく、私は、この3.11からやっぱり自衛隊や防衛省に対する国民の方々の価値観が、明確に違ってきているというふうに思っています。ご承知のとおり、皆さまいろいろご支援いただきましたし、またこの小山でも、200名近くの被災者をお受けになったり、また、その時に何千世帯の屋根瓦が地震で落ちたり、いろいろ動きがあったと思います。本当にお見舞い申し上げると同時に、次の日から、東北では私どもの仲間が自分の家族や親族、仲間を失っていながら、任務に励んでいたということで、つくづく頭が下がる。そして、感謝申し上げたいと思っています。また、本当に混乱の状態の中で、1万9千人余の方々をお救いしたり、ご遺体の回収があったり、またご飯をお作りになったりと任務を遂行されたのです。私も現地にちょっと経ってからですけどお邪魔しましたけれども、すばらしい活躍をなさった。そして、その隊員の方々が現地を離れ出すと被災者が泣いて「本当にありがとう。」という気持ちを出している姿がありました。やはり、長年静かにこの国の防衛、災害活動に励んでいた先輩、そして仲間達が、何か誇りをもう一度持てるような、そういう活躍だったんじゃないかと私は思っております。本当に感謝したいと思います。

今申し上げましたけども、災害以外にも、もちろん国防は重要であります。誰だって、非武装、非軍事で、この国が守れたらこんないいことはありません。しかし、もしそういう方がいらっしやったら、その方々は果たしてご自身のご自宅に鍵を閉めない

で寝るんですか。やっぱり鍵を閉めて寝、そしてタンス預金があったら心配だからドアの鍵も閉めて寝る。これが私は防衛だというふうに思っております。

24時間、365日。本当に身を粉にしてがんばってくれる仲間が、私達の同僚、そして仲間である防衛省、そして自衛隊の方々と私は思っています。

同時に、私はこれよく言いたいんですが、例えば10人しかいない自衛隊の方々のうち、5人が支援しに行くということは、残った5人が留守を守るわけであります。

ですから、私は、遠くに行った方々も、もちろんよくがんばった。でもその人達がいないうちに、その地元の防衛、そして捜索、そして災害派遣、ともにがんばった仲間がたくさんいるということにも頭が下がります。それと同時に、それをそれぞれの部隊の本部で支えた文官の人達にも感謝の気持ちを国民の1人として忘れないで持っていたいというふうに思っています。

このように、そういう連携があって、初めて今回の大きな災害に対応できた。

最大で10万7千人の仲間達が、自分は缶飯を食う。だけど、皆さんには温かい飯を食べていただくとがんばる姿、あの姿こそ本当に崇高な姿なんじゃないかと思っております。感謝申し上げたいというふうに思います。

さて、今日は国際協力の話ということでございます。これは、話し出すと山のように話があるんですが、まず、国際協力の始まった経緯を簡単に言えば、私どもの国の防衛や防衛計画、安全保障の指針である防衛計画の大綱が、昭和51年から始まり、その後、いろいろ中身が変わってきているなか、やっぱり顔を見せる必要があるじゃないか、実際に実施する必要があるじゃないかということで、現在の防衛計画の大綱ができ上がったのが昨年の12月であります。

私も、たまたまでございますけど、党の方で防衛部門の座長ということで、いろんな意味でとりまとめを与党としてさせていただきました。本当にいろんな意見が出ました。

動的防衛力を含めて、この国の安全保障の問題、そして、どうしなくちゃいけないかということ、文官、現場、有識者等いろいろな方をお呼びして、練り直し・練り上げを行いました。昨年、防衛大綱の中にも自衛隊の海外派遣については、本当に顔の見える体制にすべきだというふうに明確にうたうようになりました。これは動的防衛力の問題も含めてであります。私は、9月に着任したばかりですので、1度も現場には行っておりません。

皆さんのお手元に、「自衛隊の国際協力活動20年を振り返るパーフェクトガイド」というパンフレットがございます。これをちょっと見開いてください。1回目から含めて全部で32、今この南スーダンのUNMISSというのも含めまして32カ所、32回のこういう派遣がございます。それでは、なぜ、国内の災害のみならず、これだけのいろんな地域に派遣しなきゃいけないかということでございます。

今まで、日本というのは1つの航空母艦みたいなもので、外から攻めにくい状態にあった。外のことは何も知らないと言えた時代もあった。自分のことだけやれば良かった時代もあった。しかし、これだけ通信が世界的に近くなり、経済環境も非常に世界的グローバル化し、ひとまとめになってしまっている。例えば農業問題もそうじゃないですか皆さん。私も農業やっていますが、今、カロリーベースで61%も海外から入ってくるんです。これ入ってこなかったら39%のものしか飯食えないんです。では、6

1%のものを運び込んでいる船や飛行機をいったい誰が守るんだ。いつも、誰も攻めな
いくださいというわけにはいきません。それ以外にエネルギー問題もある。日本は石
油が取れません。そういう一つ一つのものを守る意味で、自分達の国だけで黙って、新
しく来たものをそのままほったらかしにする時代から、この10数年、20数年経て、
本当に明らかに国際情勢が変わってきている。それに対して、私ども防衛省・自衛隊が
参画して、他の国の安全を守ることが、私どもの生活、食べ物、経済環境を守る。この
前提があって、このPKOをはじめとする国際協力がスタートしたのであります。

そこで、何故20周年かというところ、ご周知のとおり、イラクはクウェートに攻め入っ
てしまって、ペルシャ湾は本当にいろんなことが起きました。これは1991年、湾岸
戦争であります。その時、ペルシャ湾にたくさんの機雷をイラクが置いていった。これ
を何とか片付けてもらいたい。これが1番最初の発端でございます。それから、今20
11年でちょうど20周年、今年なんです。

私はサラリーマンを20年やりましたので、実をいうとこの時はたまたまアメリカに
おりました。ちょうど湾岸戦争が始まって2日目に、いろんな事情があって、アメリカ
から日本に戻った。その時に、ちょうど湾岸戦争でドンパチやっていたということで、
印象はすごく深かったです。

自衛隊の機雷掃海についてですが、掃海艇は皆さんご存じだと思いますが、5百トン
くらいという話であります。普通、自衛隊が出す船というと大体5千トンくらいでかい
のですが、それが大きさ5百トン。なぜそんなに小さいかということ、機雷が鉄に反応す
るらしいのです。どーんと。そして掃海できない。だから、木製の船に頼った。5百ト
ンというと普通の自衛隊の艦船からすれば10分の1です。非常に小さい。5百トンの
船を6隻出して、その機雷の掃海にそういう命がけの働きをして、3~4ヶ月がんばっ
て、30いくつの機雷を掃海して非常に実績を上げたという話であります。これが
そもそもの発端。

それで、翌年もカンボジアの問題が起きて、これはパンフレットにも大きく載ってお
ります。こういうことを立て続けにやっていく。カンボジアでは、例えば橋とか道路の
補修とか、監視、要監視等々やってらっしゃる。陸海空含めていろんな部隊が派遣され
て成功裏におさめていった、こういうことでございます。ですから、国連のミッション
をいただいてやるってことはいかに重要かということ。それから、自衛隊の活動があっ
て初めてそこを通る日本船舶が守られ、それが皆さんが灯油を使ったり、ガソリンを使
ったり、いろいろ食料を安心安全で口に運べる、その元はそこにあったということであ
ります。

したがいまして、20周年でたまたま節目でありますけれども、本当に多くのPKO
をはじめとする国際協力活動をしてきました。が、全部説明するともう時間の範囲内
では収まりませんから、恐縮ですが、これは皆さんお手元のパンフレットで見ていただ
きたいと思っております。

そこで、次にまいりたいと思います。

次は、PKOというものの制度、法案についてです。「これこれしかじかだったらい
い。」また、「憲法に違反しない範囲内でどうだ。」と。

PKO参加5原則というものがあって、たとえば、紛争があった場合停戦合意がある

かとか、日本が部隊を派遣する場合は、日本が来ていいという同意が当事国になければいけないとか、あくまでも日本は紛争当事者の間で中立を保たなければいけないとか、これらが破られるなら撤収していいとか、また、その要員を守る意味での最小限の武器使用に限られるとかで、これがPKO参加5原則であります。

ただ、もちろん、捉え方にもよります。南スーダンには、私どもの副大臣が、今まさにこの月曜日から来週の月曜日まで丸々一週間、現地のチェック、そして状態を見るため、また肌で味わうために行っておりますけれども、あそこは紛争が起きていませんから、例えば紛争が起きていなければ停戦合意というのは必要ではない、そういうこともあります。これを一つ一つ丁寧に解きほぐして、その国の立ち上げの手助けをする。

例えば、東北の震災の時に、「トモダチ作戦」とか、オーストラリアとか、みんないろんな仲間が来て、顔を見せて、私どもの仲間を救ってくれたように、私どもも国の立ち上げに当たり、できる範囲内で要員の安全確保を守りながら、何かできることを進めていくというのがこのPKOの精神であります。

ですから、私は全てのことが安全であるとは思わないです。例えば、極端な話ですが、ここから一歩出た途端、そこにトラックが突っ込んできたって怪我するわけです。何がいったい起きるか分からない。それからいろんな犯罪者が今仮出所しているかもしれません。また、最近はいろんな仮出所の事件が起きていますけど、そういう人達は何悪いことするか分からない。でもそれ一つ一つがすべて100点で収まることは僕はないと思っています。ただ、国際貢献として、その国の立ち上げに対して、私どもができる限り、国連からの要請に、内容を審査した上で対応していくことによって、この日本の今までやってきた自衛隊の方々の、規律正しい、そしてまじめな仕事が、国際的にも評価が高い、同僚の仲間からも評価が高い。そしてもちろん派遣国からもいろんな強い賛同の支持をいただいていることは間違いないのであります。だからこそ、これだけ長い間、この形でPKOが続いてきたんじゃないかなと私は思っています。

PKOについてはいろいろあるのですが、ちょうど4年前に、国際平和協力活動は、我が国の防衛や公共の秩序の維持といった任務と並ぶ自衛隊の本来任務と位置付けられました。そこで、各種態勢の整備等について、平素からの取組みが重要であるとの認識から、本格的な指導をするということで、教育や研究をする国際平和協力（PKO）センターというものができました。現地には、自衛隊とは違う形でいろんな方が行っています。JICAの方もいるし、日本のNGO、NPOの方もいる。もういろんな方が、実体験を新しい仲間達に教え、そしてお互いの意見交換をし、もちろんボランティアの人達で行った方もたくさんいらっしゃいます。そういう人達の意見を総合して、いろんな意味で何が足りなかったのか、何が良かったのかを、いろいろ教育そして研究しています。それも具体的に立ち上がってきている状態であります。

さて、私の手元に、政権交代後どうだっという資料があります。私は、人の命と防衛というのは、政権がどこだろうが、どこの人がやろうと、この国を守って、命を守るには算盤ははじけないってことだと思います。とにかく守る。そして安心安全で暮らしていける。そのために人間は生きているんじゃないですか。そういう意味で、私は、政権交代だのなんだの関係ないと思っています。

ただ、具体的に言えばさっきいくつかありました。例えばハイチなんていうのは、最

初はそういうPKOなんていうのは自衛隊は出てなかったんですが、ご存知のとおりで昨年の始めくらいにハイチは大きな地震があって相当な人達が亡くなっている。30万人。そうなりますと、今度国連からミッションがきて、頼むとすれば、日本としても、これは行かざるを得ないし、行くべきだということになりまして、全党あげて2週間でとりまとめてPKOを派遣しました。

そういうことを含めて、PKOについてはその都度その都度のことになります。あくまでも、さっき言ったPKO参加5原則の中で、その要員、私どもの仲間、皆さんの仲間を守り、そしてそのご家族のケアも含めて、きちんと検証した上で派遣させていただいた結果が、今世界的に非常に高い評価を得て、そういう仲間達が逆に何かあったときに救ってもらえるのであります。

私の田舎は松本です。ちょっと行くと大町とか白馬があって、その人達はよく災害に遭うんです。今までは、今日は女性の方がいるから言いにくいんだけど、ご婦人にとっては「何自衛隊はやっているの。そんなお金かけて。」とか、「何をしているんだ」などが見えないところがたくさんあったと思います。ただ実際、ご自身のご親族が行方不明になったときに、山探ししているのは消防団、消防署、警察、そして自衛隊の人達です。災害で救われる人達、最後は自衛隊の人におんぶになっているじゃないですか。あれを目の当たりにした人達は感謝しているんです。それが国内でも海外でも行われているということでもあります。

昨年、PKOのあり方に関する懇談会ができて、今年の7月に中間とりまとめが行われ、例えば、向こうでどういうふうになったか、どれがプラスになってどういうとりまとめがおきたか、また、隊員の問題もある。いろんな人達が、派遣された隊員から聞いたり、ディスカッションをしたり、また、僕も部会に出たりしてますが、識者、NGO、NPO等いろんな人から吸収して、いろんな意味で、まだPKO参加5原則について含めて、これから議論を深めていかなければいけないと思います。これをやらずして我々の仲間を派遣するわけにはいかないと思います。ただミッションはずっと続いています。

最後に申し上げますと、例の南スーダンについては、先月28日に私の仲間が行っております。私もこの間聞いてびっくりしたんですが、派遣までに皆さん予防接種を何本注射打つか知ってますか。8回注射打つんです。しかも、間をあけなきゃいけない。それだけ強い。要するに完備されていないんでしょう、マラリアとか等々含めた部分が。今、派遣隊員の方々の選別をして、そしてその方々の健康管理、その家族に対するケアの勉強会も今月行われています。そんな中で勇気ある仲間達がそこに行って、その国の立ち上げをしております。ただ、南スーダンについては、紛争ということは起きておりません。北の方で部族間の闘争はあるんですが、その独立した後の部分については紛争ではありません。ジュバという所におそらく施設部隊を含めて立ち上がると思いますが、非常に平和な中でお伺いする。病院はあるんですが、飛行機で2時間半くらい行ったところにあるんです。そこは総合病院で手術も全てできますけど、そうは言っても、そこにも医官を含めていろいろな方々を派遣して、国の立ち上げに参加し、日本の顔をしっかりと見せて、そしてそれによって私どもの最終的なこの日本の安全保障、そして皆さんの生活の守りをやっていくということで今派遣を準備しております。おそらく来年の年

明けから多くの方々が動き出すというふうに思っております。

最後になりますが、原発の除染についても、今仲間達が行っております。私のふるさとの長野県の参議院議員が北澤前防衛大臣だったのですが、本当に私は感動したし、アメリカの人達だって命がけでこの日本を守ってくれています。だけど一番必要なのは、日本人達がどれだけ自分の国を守るかだと僕は思っています。やっぱり、皆さんが自分の家の奥さんやお子さんや孫を守るのは、まずは自分じゃないですか。他の国はその次だ。その姿を見せたのが、実を言うとあの原発の時の放水の時であります。「あれは苦渋の選択だったよ、下条君。」と僕は北澤前大臣に言われました。でもあれを見てアメリカの人達は、日本の防衛省・自衛隊は本気なんだ、それじゃあと行ってトモダチ作戦もできたと思っております。そういう意味では、あの方々の勇氣に感謝したいと思っておりますし、またそれを守ってくれたその他の仲間達にも感謝したいと思っております。

PKOというのはこの国を守るのと同じなんです。そして外でみんな一生懸命がんばって命がけでやってくれて、それが、この国の安全保障につながっていることをご理解していただきたいと思ひまして、一旦ここで私の一方的なお話を締めさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

何かこのPKOに関してでも結構でございますし、「ここは下条、お前がしっかりと大臣に言え。」でもかまいません。いろんな意味含めて、是非、ご質問等ありましたら遠慮なく言ってください。

【質問者 1】

今日は貴重な講演ありがとうございました。南スーダンへの国際協力の件ということで、ちょっと2～3お伺いしたいと思います。南スーダン建国の経緯を考えると、国際協力と言うことで自衛隊を派遣しますと、中国との関係は大丈夫なのかということがちょっと心配されるのですが、その辺はどのようにお考えでしょうか。

【回答者（下条）】

国連からのミッションを受けて、そして、その現場に何回も調整員を派遣し、その上での最終決定です。スーダンについては、これによって、中国に対するいろいろな部分でマイナスを受けるとは考えないとの結果が、今回の結論を導いていると思ひます。中国は隣国で非常に重要な国だと思っておりますけども、この件についてはそのように理解しております。そして、それが国連からのミッションだと私どもは理解しております。

【質問者 1】

どうもありがとうございました。

【質問者 2】

ありがとうございました。私は、自衛隊の前身であります、昭和27年に保安隊の第2期生として自衛隊に入りました。それから事故で帰ってくるまで約7年、各地で、職種は施設部隊でございます。施設部隊ですから、災害派遣、除雪作業、それらを受けて

おりましたけど、今回の3.11の大震災に対して、積極的に入っている施設部隊、私から言うと後輩、その者達の姿を見たときに、昭和29年の7月に、自衛隊が改正されたときに、宣誓文というのを書かされました。「我が身を持って、国民の負託に応えることを誓う」ということの捺印で、自衛隊としての、また新しい出発をしたわけです。その辺を考えてみまして、これから今の自衛隊は相当認識されたと思います。

私達の時はひどかったです。税金泥棒とまで言われました。それを考えて、この3.11に対する自衛隊、それからPKO、イラク派遣、それで私も若干、今78になり、また、50年間、野球の審判を育成してきました。それですから、どこもなんともありません。タバコも吸わなければ、酒も飲まないで、何とか元気に働いておりますし、今の天皇陛下様、平成の天皇陛下と同年配でございます。それですから、今日、PKOの問題について、これからまた、ソマリアの問題についてもお話があると思いますので、これからじっくり聞かせていただきとうございます。本日はありがとうございました。

【回答者（下条）】

ありがとうございました。そういう諸先輩のいろんなご努力があつてこそです。

私は、僕らの役割というのは、やっぱり、どれだけ皆さんが苦勞して、どれだけがんばっているかを、我々の目線できちんと一般の人に広げていくことだと思つてます。それは、任務遂行は皆さんに勝てない。文官についても省に入つてずっとやっている人達には勝てないです。僕らに勝てることは、どれだけ国を守ることが大切か、そして海外の安全保障を守ることが自分達の国にとって安全に繋がるということ、1人1人の方に本当に地道に広げていくことだと思つてます。

それは、やっぱりここへおいでの方々、是非、女性に広げていただきたい。女性はどうしても乱暴な感じがするんじゃないですか、戦車とかミサイルを見たりすると。でもそれはこの国を守るカギなんだというところを是非広げていただき、それによって安心安全に暮らす。そして子供達が楽しそうに勉強し、外で遊ぶことができる。

今、大先輩がおっしゃっていただきましたけど、そういった方々のいろんな血と汗と涙が積み重なって、今日の我ら防衛省・自衛隊を支えてくれているのだと思つております。改めて、今日お集まりの皆様にご感謝を申し上げ、そして、今日いただいた、ひしひしたる皆さんの視線に本当に感謝申し上げます。

恐縮ですが、次は本番の清水司令からいろんなお話があると思います。清水さんは、再度、僕から紹介すると、その当時、飛行機に乗っていた当時の服をそのままう一回借りてきて、今日着ています。さっき、ちょっと寒いですと言っておられました。夏用です。そこまで気合いが入っております。是非、清水さんを含めて、これからも自衛隊をご理解いただきますようお願い申し上げます、本当に、高い席から恐縮でございますが、私の講演とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

【司会】

以上で、じ後の予定もございまして、大変恐縮ですが、質疑応答はこれまでとさせていただきます。下条防衛大臣政務官、ありがとうございました。

（館内拍手）

皆様、続きまして、引き続き講演の準備をいたしますので、しばらくお待ち下さい。

お待たせいたしました。

それでは、第3次派遣海賊対処行動航空隊司令の清水 雅彦（しみず まさひこ）2等海佐より、「ソマリア沖・アデン湾での海賊対処活動」についてご講演をいただきます。

（館内拍手）

【講演 清水雅彦 2等海佐】

皆さん、こんばんは。

ただ今、紹介いただきました統合幕僚学校の清水でございます。

この度は、このような機会を頂戴しましたので、「ソマリア沖・アデン湾での海賊対処活動」について、約1年前に、実際に現場において海賊対処の指揮を執ってきた立場から、その活動状況等に関するお話をさせていただきます。

スクリーンはアデン湾上空を飛行する我が国のP-3Cです。

スクリーン右側上段は、海賊対処任務に就くため、青森の八戸からジブチに向け出発した時の雪煙を上げるP-3Cです。下段は灼熱の砂漠地帯にあるアフリカのジブチに着陸しようとしているP-3Cです。雪煙から砂煙へ。出発当日の八戸の気温はマイナス10℃近く、ジブチはプラス40℃近く、まさに約50℃という温度差の克服が最初の試練でありました。

さて、本題に入ります。

今回の次第は、海賊対処の経緯、そして私が指揮官を務めた派遣海賊対処行動航空隊にスポットを当てた行動概要、成果等の順にお話します。

スクリーンは、昨年1年間の海賊事象の発生状況を示しています。

赤色マークは乗っ取り等の事案、黄色マークはその未遂事案を表しています。

ご覧のように、海賊事象はソマリア沖・アデン湾付近と、マラッカ海峡付近に集中していることが分かります。

右上の地図に青線で示すように、我が国と欧州方面を結ぶ海上交通路上で、特に欧州方面との行き来にはスエズ運河を経由することとなり、その出入口となるソマリア沖・アデン湾での海賊事象が極めて多いことは、資源や食糧の多くを海上交通に依存している我が国にとっては大きな脅威となっています。

次に、ソマリア沖・アデン湾にスポットを当ててみます。そこにおける海賊等発生状況は、スクリーンのとおりであり、下の表が示すように、2008年、2009年と増加傾向にあり、私が任務に就いていた2010年上半期には前年（2009年）の同時期と比較し減少は見られたものの、依然として101件の海賊事象が発生しました。先にお話したとおり、ソマリア沖・アデン湾は欧州と我が国を結ぶ海の大動脈と言え、この海域を年間約2万隻の船舶が航行し、その約1割は日本関連船舶なのです。

このような背景の中、我が国の海賊対処の経緯はスクリーンのとおりです。

平成20年6月以降、国連安保理で「ソマリア情勢に関する決議」が採択され、我が国では平成21年3月に、海賊対処のための海上警備行動が発令され、護衛艦2隻が出港、アデン湾での護衛活動を開始しました。

航空部隊については、平成21年5月28日に第1次要員が出国し、ジブチ到着の後、6月11日には警戒監視飛行を開始、7月24日からは新法、いわゆる海賊対処法に基づく活動に移行しました。

この新法では、船籍を問わず、すべての国の船舶を海賊行為から防護することが可能となり、また、民間船舶に接近するなどの海賊行為を行っている船舶の進行を停止するために他の手段がない場合、合理的に必要な限度において武器の使用が可能となりました。

その海賊対処に係る派遣海賊対処行動航空隊の変遷は、スクリーンのとおりです。私は赤枠で囲む第3次の指揮官として、昨年の2月から6月まで任務に当たってまいりました。

活動の拠点は備考欄に示すように、ジブチ国際空港南側に所在する、米軍のキャンプ・レモニエに置かれていました。そして、第7次からは新活動拠点に移動し、現在は第8次の航空隊が海賊対処行動に従事中です。今お話した拠点については、後ほどもう少し詳しくお話しします。

さて、派遣海賊対処行動航空隊の任務等はスクリーンのとおりです。

すなわち、その任務はソマリア沖・アデン湾における船舶の航行の安全確保のため、警戒監視及び情報収集を行うとともに、海賊行為を制止することです。特に、現場上空にて収集した情報については、付近を航行中の水上任務部隊（我々の派遣時には海上自衛隊の護衛艦おおなみ、さわぎりの2隻）との情報交換や、諸外国の活動部隊等に情報を提供したり、あるいは情報を得るといったことを通じて、任務に当たってまいりました。

スクリーンは上空から警戒監視等を行ってきた、海上自衛隊のP-3Cです。

P-3Cは元々は旅客機をベースに、哨戒機として開発された航空機で、海上自衛隊では昭和56年（1981年）から導入・運用を開始し、我々はソマリア沖・アデン湾においても、このP-3C2機をもって、海賊対処任務を実施してまいりました。

現在、海上自衛隊のP-3Cは、スクリーンに示すように、八戸、厚木、那覇などの航空隊に合計約80機が配置されています。

この中で私は八戸の第2航空隊副長として勤務中のところ、同航空隊2機のP-3Cとともに、海賊対処任務に当たってきたわけです。

我々の活動海域等はスクリーンのとおりです。

ちょうどアフリカの角と呼ばれるところで、英語では『Horn Of Africa』というのですが、略してHOA、その部分は国としてはソマリアになります。ジブチという国は首都の名前も一緒なのですが、HOAの付け根のここにある小さな国です。西側にはエチオピア、そして北側にはイエメンがあります。先ほどから申しているとおり、我が国の船舶も含めまして、海上のルートとしてはここを通り、この海域を通過し、更に上のスエズ運河を経て、ヨーロッパの方に行くわけでありまして、したがって、西側に行くもの、東側に行くもの、こういった船舶の往来が激しい場所で、海賊からそういった船舶を守るといった任務についてきたわけでありまして、航空部隊はこの海域を広域に飛行いたしまして、警戒監視、それから情報収集を実施してきました。

これに、日本地図を重ねてみます。

ジブチの位置がちょうど福岡ですので、P-3Cはそこから飛び立ちまして、ちょうど今皆さんいらっしゃる小山のところぐらいまでを飛行して再び福岡に帰ってきていたこととなります。また、福岡と小山間をもちろん直線ではなく、ジグザグに警戒監視をしな

がら日々飛んでいたという状況であります。

水上部隊につきましては、同じく海上自衛隊の艦艇が2隻でそれぞれの船舶を護衛し、この海域を航行しており、その上空を我々が担任して飛行していたというような役割分担で、海賊対処活動を実施しておりました。

スクリーンはある日のアデン湾の状況です。

このシーンは、護衛対象船舶の中に、インド洋からスエズ運河経由、欧州に向かう我が国の客船「飛鳥Ⅱ」が含まれていて、その近傍を護衛中の護衛艦「おおなみ」と、上空から警戒監視中のP-3Cを捉えたものです。

「飛鳥Ⅱ」の向こう側には、諸外国の護衛対象船舶が見えます。

ちなみに、「おおなみ」からの通信によれば、この日のアデン湾の海水温度は33℃もありました。

次に、私達の派遣先、ジブチ共和国の概要について、お話しします。

ジブチは我が国から約1万km、時差にして6時間離れ、アフリカの角(Horn of Africa)の付け根の北緯11°東経43°に位置しています。

その北西側には欧州に至るスエズ運河があり、古くから中継貿易国としての要所にあつたと言えます。

面積は我が国の四国と同程度、人口は約80万人で、そのうち約15万人は難民、ホームレス、駐留軍人等を指す「特殊人口」とされ、厳しい国情を表しています。

歴史上、1977年にフランスから独立し、現在も国防協定に基づき、フランス軍が駐留しています。

産業はジブチ自治港、国際空港での港湾サービス、お隣のエチオピアに至る鉄道を介した中継貿易に依存し、食糧自給は難しい状況にあります。

気候も高温・多湿、砂嵐等、厳しい一方で、基本的に治安状況は良く、対日感情はとても良好であったとの印象を持っています。

スクリーンはジブチでよく見かけた野ラクダがペットボトルの水を逆さ飲みしているシーンです。ペットボトルは人が与えたものなのでしょう。

我が国ではもう見られなくなった、野良犬のほか、このような野ラクダやガゼル(小シカのような動物)を街中や沿道のここそこでよく見かけました。

灼熱の砂漠地帯という表現どおり、日陰でも気温は40℃超え、特に飲料水は必需品でありました。現地には所在の米軍指揮官からは、「新着任の指揮官として、まず最初に考えるべきことは、部下にどのようにして水を与えるか、ということだ。」とアドバイスされたほどです。現場の米軍の基地の中にはこのようなクーラーボックスが、100mに1ヶ所くらいずつ必ず置いてありまして、ミネラルウォーターをいつでも取れるような状況になっておりました。また、砂漠地帯といいますが、湿度もかなり高く、私の頃は湿度は80%くらいあることもありまして、非常に蒸し暑いという状況でありました。

ここで、ジブチの事情を思いつくままにもう少しお話しします。

私がジブチに派遣されている間に、ちょうど「INTERNATIONAL LIVING」という米国の情報誌上で、「住みやすい国ランキング(2010年版)」が発表されました。

これは、生活費、経済、文化、天候等の指標を採点してランキング化したものです。そ

の結果、第1位はフランス、以下、オーストラリア、スイスと続き、日本は36位、中国は97位で、ジブチは194カ国・地域中188位、最下位はソマリアでした。

現地のジブチ人に言わせると、ジブチには季節は2つしかないそうです。それは「暑い」と「凄く暑い」の2つなんです。

国内には信号機が1つありません。交差点ではタイミングを図りながら、勇気をもって通過してきました。

暑さのせいか、舗装道路は穴だらけ、その穴を避けながら、ゆっくりと通行しようとする、ブッシュの陰から何やら数人の人が現れ、せつせと道具もなしに穴を埋め始め、その補修成果の対価を要求したり、先ほどの野ラクダの写真を撮ろうものなら、「あれは俺のラクダだ。撮影料をよこせ。」と言いながら、お小遣いを求めて来たりと、そういった場面によく出くわしました。

ただ、決して恐喝してきているわけではなく、屈託ない笑顔で近寄ってくる様子、そこには失業率が約70%を超えるとされる厳しい現実がありました。

また、ジブチは、歴史上の旧宗主国フランスをはじめ、9.11同時テロ以降、統合部隊司令部を展開している米国、EU諸国の人々等、人種のるつぼ状態を呈していると感じました。

そして、人類共通の敵である海賊に対処する各国の思惑を乗せた海賊対処のメッカになってきたとの印象を持ちました。

スクリーンはジブチ国際空港の外観です。

国内唯一の3,000m級の滑走路を有し、ジャンボ機を始めとする民間航空機、隣りにフランス軍、米軍の軍用機等が盛んに離発着しています。

この滑走路の北側には国民や駐留軍等の国外への玄関口となる国際空港エリアやフランス軍、南側に米軍のキャンプ・レモニエが所在し、我々派遣隊員はこのキャンプ・レモニエ内に居住していました。

一方で、P-3Cの駐機場所はスクリーンでは滑走路上側の北側にあり、現在の派遣部隊が所在する新活動拠点はそのすぐそばに位置しています。

キャンプ・レモニエを活動拠点としていたのは、そもそもジブチへの航空部隊展開の際に、ジブチ政府及び在ジブチ米軍と交渉した結果の、暫定的な措置であったことによります。また、ご覧のとおり、我々がキャンプ・レモニエからP-3Cの駐機場に移動するには、徒歩と車両で約1時間近い所要があった問題点は、新活動拠点の運用によって解消できました。

スクリーンは本年6月1日に運用を開始し、じ後行われた開所記念式等の1コマです。

私が任務に就いていた時にはこのような施設はありませんでしたが、この新活動拠点には、厳しい自然環境の中でも、隊員が心身ともに健康に任務に就けるよう、司令部庁舎、宿舎、医務室や日本型の浴場も備えていると聞いています。

細部は、統合幕僚監部のホームページを是非ご覧下さい。

また、明後日17日(土)の夜21時から、BSジャパン(7CH)で放映予定の「池上彰の世界を行く」の前半部分で、現地からの報道があると聞いています。そこでも、新活動拠点の紹介があるそうです。

さて、海賊対処活動の中身の説明に移ります。

まず、部隊の編成については、スクリーンのとおり、自衛艦隊司令官の隷下に、左側の水上部隊と、右側の航空隊が置かれています。

水上部隊は指揮官の下、護衛艦2隻、ヘリコプター等を擁し、護衛艦には海上保安官8名も同乗し、約400名からなっています。

赤枠で囲む我々派遣海賊対処行動航空隊は、指揮官の私以下、司令部、飛行隊、整備補給隊、基地業務隊、そして、駐機場における警備に当たる警衛隊、警務隊によって編成され、海上自衛官約100名、陸上自衛官約50名の合計約150名の陣容で任務に当たってきました。

その特色は、このように海上、陸上自衛官の統合部隊であったことです。

当初は、戸惑いもありましたが、私は指揮官として、海上、陸上の垣根を越え、強い任務達成意欲をもって、業務に当たるよう、指導してきました。

なお、新活動拠点での運用が始まった現在は、合計約180名が派遣されています。

次に、スクリーンは国際社会による海賊対処の枠組みを示しています。

ソマリア沖・アデン湾においては、ご覧のように大きく4つの枠組みで各国が海賊対処に当たっています。

第1はCTF (Combined Task Force) 151と呼ばれる有志連合海上部隊です。

第2はEUNAVFOR (EU軍) が展開するアタランタ作戦です。

第3はNATOが実施中のオーシャンシールド作戦、そして、第4が我が国を始めとするNATIONAL TASKINGと呼ばれる各国独自の活動によるものです。

現場海域では、これらの異なる枠組みに基づく、艦艇、航空機等が相互に情報を共有し、共通の目的である海賊対処に取り組んでいるわけです。

それでは、実際にどのような活動をしてきたか、2つの事例を紹介します。

スクリーンは警戒監視中の我が国P-3Cが発見した、海賊船らしい船舶です。海賊は主にスキフと呼ばれる、本来は漁業などに用いる小型ボートを使用します。その特徴は、ご覧のように、海賊が他の船に乗り込む時に使う、梯子を搭載していたり、この例のように、漁具は一切見当たらず、代わりに乗員が7名も乗っていることなどです。

現場にはこのようなスキフが多数航行しており、その中から海賊船らしい目標を識別することはとても難しいことでした。

次に、P-3Cは、現場付近に留まりながら、状況を確認しつつ、付近に所在する艦艇や、海賊船が近づいて行くと思われる商船等に、通信で状況を通報しました。先ほどの海賊船らしい船は、ちょうどここを航行中のタンカーの方に向いておりました。したがって、ひょっとするとこの海賊船らしい目標が、このタンカーに対して海賊行為を行うのでないかとそういった観点で警告するわけです。

次に、P-3Cからの呼びかけに応え、付近で警戒監視中のドイツ艦艇が搭載ヘリを発艦し、目標の識別を実施することとなりました。P-3Cは上空で状況を把握しつつ、ドイツ艦艇ヘリを海賊船らしい船舶に誘導しました。ちょっと見にくいのですが、ここにドイツの艦艇に搭載していたヘリコプターが海賊船らしい目標に向かっていくところです。ちょうどここに船外機が付いているんですが、ここにもう1つ船外機がありました。先ほど上空で見た同じ梯子がここにあります。そしてこちらから調査している時に、ここに海

賊と思われる人物が多数写っております。

最終的にはドイツ艦艇から降ろされた搭載ボートが目標に横付けし、状況把握と必要な措置を実施しました。確認の結果、梯子の存在に加え、高速で航行する時に使用するつもりだったのか、更に予備の船外機を搭載していたことが判明しました。

こうして、海賊行為を未然に防止できたわけです。

次に、2つ目の事例を紹介します。

スクリーンは実際にP-3Cが撮影した写真ですが、確認の結果、機長は海賊船らしい不審な小型船であると判断しました。それは何故かと申しますと、やはり決め手の1つは梯子です。艦舷といいます、船の横の部分、ここに梯子を掛けて海賊は乗り込むことから、どうしても長い梯子が必要になります。1つ目の事例と同様にP-3Cは継続監視しつつ、関係機関等へ情報を提供しました。

この例では、ご覧のように、船外機を2基使用して、高速航行中であり、青いポリ・タンク多数、長い梯子に加え、小銃らしき物件を搭載していました。同様に、漁に使う漁具は一切なく、不釣り合いの8名の乗員を確認しました。

この時は、付近を航行中のフランス艦艇搭載のヘリコプターが現場に到着し、逃走するスキフに対して警告射撃を実施しました。スキフの進行方向前程に赤枠で示すとおり、警告射撃による水柱が見えます。

最終的に、フランス艦艇搭載のボートが目標に位置付けし、立入検査を実施しました。

フランス艦艇は目標が武器の海中投棄を確認しており、一旦、乗員を艦内で取り調べた結果、無害と判断し乗員を釈放したと聞いております。

これらは一例であります、現場ではこのようなことを日々繰り返し、海賊対処任務に当たっております。

その他、私が任務に就いていた間のトピックスを皆さんに紹介したいと思います。

第1点は任務実施中の出来事でした。それは、たまたま私がP-3Cに搭乗していた時なのですが、P-3Cが、水上部隊が護衛中の船舶の近傍を通過しようとした際、機上の見張り員が私に双眼鏡を手渡ししながら、「司令、あの貨物船のブリッジを見て下さい。乗組員が整列して、こちらに敬礼しています。あちらにいる船も同様に敬礼しています。」こういった報告を受けたのです。早速、自ら双眼鏡で確認してみると、なるほどそのような状況を確認できました。我々がジブチに到着してから、既に日数が経過し、酷暑の中、部下隊員の疲労も溜まってきたころでもあったのですが、その機上見張り員は「司令、我々は間違いなく感謝されているんですね。」と目頭を押さえながらつぶやきました。我々の地道な努力が通じた感動の一場面と思っています。海賊対処の現場は海上であり、海上自衛隊の搭乗員が正面に出がちですが、ジブチの拠点には汗だくになりながら航空機を整備する隊員、駐機中のP-3Cの警備に当たる陸上自衛隊員や縁の下の力持ちとして基地業務に当たる隊員がいます。そして、定期的に必要な資材等を我が国から運んでくれた航空自衛隊の航空機等、陸・海・空自衛官が一丸となって任務遂行している様は、指揮官の私にとってはどれもが感動の一場面の連続でありました。

第2点は自然の脅威を実感しました。連日の酷暑のほか、アデン湾を進んでくるサイクロン（インド洋で発生する台風）にも遭遇しました。また、遠く離れたアイスランド火山の噴火も、実は欧州の飛行場が一時期すべて閉鎖されたため、ジブチへの補給ラインが断

たれ、一時的に食糧事情などに影響が出ました。自然には勝てない。当たり前のことながら身をもって理解できました。

第3点は現地で、隊員皆がよき外交官として活躍してくれたことです。例えば、ジブチには我が国のODAで立ち上げた「フクザワ」という名称の中学校があります。フクザワとは教育資金援助に貢献した我が国への感謝の気持ちを込め、「福澤諭吉」のフクザワの意味と、ジブチで使われているソマリ語という言語なのですが、現地の言葉で「未来を切り開く」という2つの意味があるのだそうです。隊員達は余暇を利用し、フクザワ中学校や孤児院に出向き、様々な交流に努めました。隊員達は我が国に残してきた子供と同年代の子供達と接することで、ストレス解消にもなっていたようです。その結果として、ジブチ人の対日意識は日に日に良くなっていったと認識しています。

第4点は指揮官として苦勞した点のうち、隊員のメンタルヘルスについてお話しします。私達が派遣されている期間に、日本は東北北部沿岸を中心にチリ大地震に伴う津波が来襲しました。その状況はインターネットなどを通じ、ジブチにも伝わるのですが、肝心の隊員家族の安否が気になります。自分達の家族が無事なのかどうかといったことは、もちろん地元で各支援に当たる自衛隊員などなどがしっかりと面倒みてくれているものの、現地ではやはり心配になります。

また、同じようにちょうど東北地方は豪雪でありまして、隊員の約7割は、青森あるいは東北地方からきているといったようなことがありましたので、その隊員達に状況を詳しく説明したりして、とにかく不安のないようにといった努力をしたつもりであります。

結果として大きな被害はなかったものの、豪雪と同様に隊員が安心して任務に集中できるよう、メンタルな部分には意を配しました。

こうして、任務後半になりますと任務をきちんと完遂した上で、我が国、日本に無事に帰ることが我々に残された最終的な役割だといったことを思いまして、士気は最終的にはどんどん高まったというふうに認識しています。

最後に、成果等について、お話しします。

成果の第1は、冒頭でもお話したとおり、ソマリア沖・アデン湾における海賊行為の減少に寄与できたことです。少なくとも我々のP-3Cが88回の警戒監視実施中に、護衛船舶に対する海賊行為は皆無でした。指1本たりとも触れさせませんでした。しかしながら、広大な海域のいずれかでは海賊行為は現にあったわけであり、海賊対処任務の必要性は今後も継続していくと考えます。

第2は、約150名の優秀な隊員と、遠く我が国から応援して下さった隊員家族をはじめ、国民の皆様のお陰で任務を完遂できたことです。私が指揮官として着任した時に、皆の前に立ち、我々は隊員相互が、融和、団結し乗り切ろうといったことが十分に機能したというふうに自負しております。

約4カ月ぶりに愛機P-3C2機とともに我が国に降り立った時、緑豊かな大地と美しい街並みに今更ながら感激しました。

こうした祖国の平和と独立のために、微力ながら貢献できていることの喜びを噛み締めながら、今後の勤務にも鋭意臨んでいく所存です。

私が用意しました資料などについては以上でございますが、何かご質問等いただければお答えしたいと思います。

スクリーンは次の次をお願いします。ちょうどこれは航空機を整備している状況です。非常に暑い中、飛行前後点検、こういった飛行服あるいは整備の服がもう汗でにじんでくるような状況下でしっかりと整備にあたっておりました。

それから、我々にはなかったのですが、エンジンの交換作業といったようなことも我々の派遣の前後にあったと聞いております。

次は、ちょうど駐機場からP-3Cを誘導している隊員です。ちょっと見にくいですが、彼もすでにもう汗まみれでありまして、ここからP-3Cがアデン湾、それからソマリア沖に向かっていったところであります。

次は、陸上自衛官が警衛勤務にあたっている状況です。こういったところを野ラクダが歩いているのです。まわりから航空機P-3Cに対して脅威はないかというのを、一生懸命警衛してくれました。ここは外部で偵察する場所であり、扇風機はかろうじて回ってはいましたが、あとは蚊取り線香だけの状況で、大自然の中で警衛にあたっていたということです。

先ほど口頭で申しましたけれども、これが現地交流の様子です。フクザワ中学校における活動の状況、それから、これがいわゆる孤児院、ストリートチルドレンセンターでの活動の状況、それから日本語教室での支援をしている状況、こういったことをやってまいりました。

何か、ご質問ございますでしょうか。

【質問者 3】

海上保安官 8 名というお話がありましたが、どういう役割をやっていただいたのでしょうか。

【回答者（清水）】

海上保安官につきましては、実際に海賊対処活動が起きた際にはその警察権を執行するために乗っております。したがって、海上自衛隊の艦艇の方にそれぞれ分かれて乗っていたわけですが、もしも海賊行為などがあり、その行為があったときに警察権を執行するといったようなために、海上保安官が乗っていたというわけであります。

よろしいでしょうか。

【質問者 3】

ありがとうございました。

【質問者 4】

P-3Cでは、八戸からジブチまでワンパスでは行けないと思いますが、どこに降りたのですか。

【回答者（清水）】

今のご質問はP-3Cがどのようなところを経由していったかというところでございますね。これにつきましては、事柄の性質上といたしますか、相手国との関係がございます

て、ここでは回答は控えさせていただきます。ただし、当然P-3Cの性能上では、直接ジブチまでは行くことができません。なお、陸上の自衛官、それから司令部の要員などについては民間の航空機に乗りまして、それでジブチにまいりました。

【質問者4】

何回ほど経由したのですか。

【回答者（清水）】

数回ほどです。（笑）

【質問者5】

航空機の燃料は、どこから持ってきたのですか。自前で調達したのか、それとも、各国が共同でやっていたのですか。

【回答者（清水）】

実際に空港の写真があります。これが空港の状況でありまして、先ほどご説明したようにP-3Cはここに駐機しておりました。それでここに民間の空港施設があります。いわゆる航空機の燃料というのは、どの航空機でも基本的には、ターボプロップとかジェットエンジン用に同じような燃料を使っておりますので、その燃料会社から契約行為をもって燃料を買い、そしてP-3Cに搭載しておりました。

【質問者6】

素人で良く分からないのですが、大型のヘリ空母のようなものがありました。あれなら、補充しないでもいいし、良いと思ったのですが、難しいですか。

【回答者（清水）】

ヘリ搭載艦の「ひゅうが」とかそういった大型のものをおっしゃっておられますか。

私の個人的な意見も入りますが、そういった護衛艦にはそもそもの任務が当然ございます。そういったものを海外に割くということは、その任務の一部を外に持つていくことになります。やはり我々の軸足は我が国の防衛でありますから、そこに視点を置いた上で、必要であればそういった大型の艦艇が外に出ていくことも可能性はゼロではないと思います。しかしながら現状では、先ほど申したとおり、海上自衛隊の護衛艦2隻、それからP-3C2機、これをもって海賊対応にあたっているというふうにご理解いただければと思っております。

【質問者7】

先ほどのスクリーンで、ドイツとフランスの方が小型艇に乗り込んで海賊船に向かっていく写真を拝見しましたがけれども、ああいった時、海賊が平気で撃ち返してくるケースというのはそんなに無かったということなんでしょうか。

【回答者（清水）】

私がちょうど任務をやっているときには、幸いにしてこういった具体的な海賊対処事案というのはございませんでした。その前後においていろいろなこういった事象があったわけでありまして、結果としてそのような海賊が、我々の護衛艦あるいは航空機に対して撃ち返してきたというような事象は私はなかったというふうに認識しております。

しかしながら、このソマリア沖・アデン湾という海域においては、実際に武器を使って乗り込んできた例もございますし、それからいろいろ報道されておりますが、諸外国の軍が乗っ取られた船に乗り込んで人質を無事救出したとか、そういった例もございまして、海賊が武器を持っているということ、これは事実でありますので、いつでもそういう危険な状況にはなり得るんだという認識は常にもって行動しておりました。

ご質問の答えとしては、直接、そういった我々が撃たれたというような状況はございません。

【質問者7】

引き続きの質問なんですけど、各国の艦艇がそろってきたからそういうことになったみたいな感じなんですか。要するに、海賊が商船を襲いはじめて初期のうちはそういうこともあったけれどもみたいなそういう理解でよろしいのでしょうか。

【回答者（清水）】

私の知識としましては、このソマリア沖・アデン湾にいる海賊と、それから前半でご説明したマラッカ海峡、フィリピン・ボルネオのあちらの方にいる海賊とはパターンが違います。ソマリア沖・アデン湾は、実際に海賊が航行している船に乗り込んできて、それで人質をとり、その船を乗っ取り、それを回航して、その身代金を要求して富を得るといったようなのがソマリア沖の海賊。一方でマラッカ海峡のあちらの方の海賊は停泊している船にこっそり乗り込んでいって金品を奪うと、大きく分けるとそういう違いがあるというふうに認識しております。したがって、このソマリア沖・アデン湾における海賊というのは、ある意味、動いている目標があったらそれに乗り込んできてもやろうというものですから、それに対して各国がそれぞれの国益を背負って海賊対処任務に立ち上がった訳であります。その結果として、成果はあり、ソマリア沖・アデン湾における海賊対処をすることから、そこにおける海賊というのは減少したり規模が縮小していくというふうに認識しているわけです。

それで、先ほどのご質問の主旨にあったように、各国がでてきたらその反作用的に海賊が増えてるんじゃないかというようなことがあるかもしれませんが、これは海賊そのものの数が減っているとかそういうことではありません。それはずっと続いているんだろうという中であって、たまたまそれに対応する各国の軍がそれに対応してきているという総合作用であって、各国が危機感をもって出てきている、それに対して海賊も自分達の生計を立てるために出てきているし、ぶつかり合いがあるということです。別にその軍隊が来ているからそれに抵抗しているとか、対抗しているとか、そういったことはないと思っております。

加えまして、繰り返しかつ我々の部隊の自慢話になりますが、我々の護衛している船舶

については、今まで海賊に指1本触れさせておりません。

【質問者7】

海外において自衛隊が抑止力を十分に働かせていることが理解できました。どうもありがとうございました。

【質問者8】

今の他に固定翼で哨戒機を派遣したなど、各国間であったのでしょうか。

【回答者（清水）】

はい、答えはありました。先ほども申しましたが、いろんな枠組みの国が現場で同じ目的でもって活動しているわけですが、その国々の多くは同じように航空機を飛ばしておりました。その航空機とも、それから艦艇とも、先ほどご説明したとおりの情報交換を行いながらそれぞれの役割を果たしたということで任務を遂行してきました。

答えになっているのでしょうか。

【質問者8】

固定翼でもあったということですか。

【回答者（清水）】

はい、固定翼もございます。固定翼は先ほど申したように、ジブチの国際空港というところには米軍やフランス軍といったいろんな国が展開しておりますので、そういったところの部隊については、固定翼の航空機を持っておりました。

【司会】

お時間がまいりましたので、これで質疑応答を終了させていただきます。清水2等海佐ありがとうございました。

（館内拍手）

以上をもちまして、第21回防衛問題セミナーの全てのプログラムを終了いたしました。本日はお忙しい中ご来場いただきましてありがとうございました。お忘れ物がないようご注意ください。

本日は誠にありがとうございました。